

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 10 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520532

研究課題名(和文) 象形文字ルウィ語の歴史言語学的研究

研究課題名(英文) A Historical Linguistic Study of Hieroglyphic Luwian

研究代表者

大城 光正 (OSHIRO, Terumasa)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：40122379

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：象形文字ルウィ語の歴史的考察として、カルケミシュで発見された碑文の言語分析から導入したinitial-a-finalとr転化の二つの通時的な指標マーカ-の有効性をカルケミシュ以外のアムク、ビート・アディニ、サマルから発見された碑文言語から確証した。更に、象形文字ルウィ語碑文に散見される記念碑体と草書体の字体の碑文の作成年代別の比較考察からの両字体の混用が後代に作成された碑文ほど多いことや造字法上の工夫(頭音法、多音法や同音異字等)も指摘できた。

研究成果の概要(英文)：From the viewpoint of historical research of Hieroglyphic Luwian, two important linguistic markers such as initial-a-final and rhotacism are clearly valid by linguistic analysis of various inscriptions discovered at Amuq, Bit-Adini and Samal. Furthermore, two hieroglyphic sign-types (monumental and cursive) are mixed in use especially in later Hieroglyphic Luwian inscriptions and also some scribal device such as acrophony, polyphony, [a]/[m]-value signs and homonyms is surely important for diachronic research.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：言語学 象形文字ルウィ語 歴史言語学 ルウィ象形文字

## 1. 研究開始当初の背景

象形文字ルウィ語の研究は未解読言語として同言語が記述されているヒッタイト/ルウィ象形文字の文字解読(音価の決定等)からスタートし、その碑文言語の判読の過程で記述されている言語資料の内容の解釈と言語の帰属問題に注目された研究が長い間続いてきた。その後の言語の印欧アナトリア語派に帰属することが決定的となって以降は、同語派の主要言語のヒッタイト語の詳細な考察のおかげで、象形文字ルウィ語の研究も徐々にではあるが、碑文言語の詳細な記述と翻字翻訳という文献学的研究と記述的研究が大いに進展していった。特に、当時のロンドン大学教授の J.D.Hawkins による *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions* (2000, de Gruyter) の公刊によって両研究は飛躍的に進展したと言える。ただ、同資料はほとんどの象形文字ルウィ語碑文の翻字、翻訳、注釈が記載されているとはいえ、主に文献学的記述的な研究資料と言えるものであり、あくまでも同資料から網羅的かつ歴史的な観点からの考察はほとんどできないのであった。例えば、各碑文の成立年代や字体の特徴の記述が資料ごとに取り上げられてはいるが、これらの特徴を地域的、歴史的な観点からの考察に援用するためには各碑文からの言語的、文字使用上の特徴の抽出を個々に分析検討する必要が必須であり、同視点からの考察が今までのところ実証的な考察としては存在していなかったことは否めない。それゆえ、今後の象形文字ルウィ語の歴史言語学的考察には、各碑文に共通な通時的な指標マーカーとなる言語的特徴の同定とその特徴の有効性の検証を包括的に進める必要がある。この立場からの考察が大きな成果を上げることによってはじめて象形文字ルウィ語の共時的研究に加えて通時的研究が提示されることによって、真にこの言語研究が完成の域に達したと言えるのである。これによって、象形文字ルウィ語の印欧アナトリア語派における言語的位置の同定のみならず、同語の下位区分のルウィ語群内の同言語の言語的位置の確証にも繋がるものとして期待されるのである。

## 2. 研究の目的

(1) 古代アナトリアでは、エジプト象形文字とは異なった独特の象形文字が、紀元前 10 世紀から紀元前 8 世紀にわたる成立年代の碑文を中心に、南東アナトリアから北方シリアの地域において多数発見されている。この文字の起源は明白ではないが、おそらくエジプト象形文字を来源としてクレタ象形文字等のエーゲ海域の象形文字創案の刺激を受けてアナトリア西部又は南部でアナトリア固有の象形文字の創造に至った可能性が高い。この文字はヒッタイト王国時代(紀元前 17C ~ 紀元前 13 末)にすでにヒッタイト王名等の印章に使用され、更に岩壁刻文や石

碑文(言語はルウィ語)にも使用されていることから、「ヒッタイト象形文字」と呼称されてきたが、ヒッタイト王国滅亡後にルウィ系民族やウラルトゥにも伝播していることから、古代アナトリア固有の象形文字として、「アナトリア象形文字」という呼称がより正確なものと言えよう。その中でもルウィ民族によって使用された碑文言語は印欧アナトリア語派のルウィ語系の言語として「象形文字ルウィ語」と呼称されている。同言語は研究者間の象形文字音価や文脈解釈の相違に加えて、古層の楔形文字ルウィ語研究の進展によって、象形文字ルウィ語特有の言語的特徴が比較言語学的研究において軽視される傾向があったが、J.D.Hawkins(ロンドン大学名誉教授)による象形文字ルウィ語碑文の網羅的な翻字・翻訳・注釈の資料集『*Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions*』(2000 年)の刊行によって、同言語とヒッタイト語を代表とする印欧アナトリア諸語との比較言語学的研究のみならず、象形文字ルウィ語のルウィ諸語(特に楔形文字ルウィ語とリュキア語)内の言語的位置の究明も進展しつつある。とはいえ、これらの詳細で包括的な研究には、個々の言語の通時的な言語変遷の実態の把握が必至である。3 万枚以上の楔形文字粘土板資料を有するヒッタイト語や楔形文字ルウィ語の歴史比較言語学的研究は吉田和彦氏(京都大学教授)や Craig Melchert(ノースカロライナ大学教授)によって解明が大いに進展しているが、象形文字ルウィ語自体の碑文の成立年代ごとの言語的特徴の抽出と分析、同特徴の来源、象形文字ルウィ語の包括的な歴史言語学的な考察はほとんど進展がないのが現状である。研究代表者の大城は印欧アナトリア諸言語の比較言語学的なアプローチによって、象形文字ルウィ語の印欧アナトリア諸語における言語的位置の解明、同言語と他の印欧アナトリア諸語との言語接触、象形文字ルウィ語の未解明の言語的特徴の同定、更には象形文字碑文の地域的な言語変異の実体モデルとして、同一地域の碑文出土数では最多のカルケミシュ碑文の通時的な言語的特徴の抽出と分析、同碑文の象形文字ルウィ語の言語変遷の実体を明らかにした。このモデルを基にして、他の全ての象形文字ルウィ語碑文の通時的な言語的特徴の抽出と分析によって、象形文字ルウィ語の言語変遷の全体像が明証されるものと確信している。

(2) 本研究では、上述の Hawkins によって編纂された象形文字ルウィ語碑文集に網羅された碑文の出土地別の碑文に散見される特有の言語的特徴の抽出と分析、同特徴の通時的な言語変化の様相を明らかにして、象形文字ルウィ語の紀元前 10 世紀から紀元前 8 世紀にわたる通時的な言語変遷を、筆者の先行研究の成果である変遷モデルとの比較考察によって明らかにすることができる。更に、同言語の変遷過程を明らかにすることによ

って、従来十分に明証されてこなかった象形文字ルウィ語の古層の言語事象から変遷して生じた後代の言語的特徴の生成に至る通時的な言語過程と象形文字の字体の記念碑体と草書体の使用に関する字体の使用区分の通時的な様相に関する空白部分にも新たな光を当てることができる。この研究によって、印欧アナトリア諸語に所属する象形文字ルウィ語という言語史のみならず、印欧アナトリア諸語の歴史比較言語学的研究や更には印欧比較言語学研究に新たな知見を付与することが期待できる。

(3) 研究代表者の大城は、1996 年以来、「西アジア言語研究会」を京都産業大学において主宰し、22 年度まで 17 回を数えている。同研究会の主要なメンバーには、印欧比較言語学・ヒッタイト語学専門の吉田和彦(京都大学教授)とセム語学専門の池田潤(筑波大学教授)を含め、アフロ・アジア諸言語専門の 25 人ほどの研究者が参加し、各研究者の研究成果の評価や研究レビュー、情報交換等、毎回活発な議論を行っている。そこで、本研究の趣旨を含めた象形文字ルウィ語の歴史を詳細に記述した研究書が残念ながら皆無に等しい現状の中で、引き続き大城主宰の「西アジア言語研究会」に於いて、上記の吉田(京都大学)、池田(筑波大学)を含めた研究者と、研究の方向性や中間成果に関して意見交換の場を持つことも含めて、本研究課題が認められれば、国際的にも注目されるものと確信する。これによって、象形文字ルウィ語の歴史言語学的考察の立場から、成立年代や出土地を考慮した碑文の言語分析を通して象形文字ルウィ語の言語史における諸々の空白部分に新たな光を当てることができ、象形文字ルウィ語内の言語史の実態に新たな知見を加えることが期待できる。

### 3. 研究の方法

(1) 象形文字ルウィ語の碑文資料を出土地別、年代別に分類して、各碑文の特異な年代的な言語的特徴と更にはルウィ象形文字の字体の比較考察を行って、同特徴の来源と変遷過程、更には字体の使用分析と文字音価の変遷を究明する。同碑文の出土地、年代別の分類に際しては、国際的に碑文編纂では高い評価を受けている J.D.Hawkins の『Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions』(2000) を使用し、出土別に、全体を 10 地域(Cilicia, Karkemish, Bit Adini, Samal, Malatya, Commagene, Amuq, Aleppo, Hama, Tabal)に分類するが、筆者の先行研究によって、カルケミシュにおける碑文言語の言語変遷モデルが提示されているので、同モデルの最終の有効性の確認作業と同モデルを援用しながら、他の地域の碑文言語の通時的な考察を進める。特に、ヒッタイト王国滅亡(紀元前 13 世紀末、より正確には紀元前 1200 年頃)から紀元前 10 世紀ころの古層の象形文字ルウィ語の特徴と後代の紀元前 8 世紀後半の時

期に作成された碑文間にはいくつかの新旧の明白な言語的特徴が散見されるので、同特徴の抽出と成立過程を考察する。

(2) さらに、それらの言語的また文字の字体の使用状況(各碑文内の字体の混用の実体: 記念碑体と草書体)が地域特有の言語接触、言語借入、内部改新等の明確な根拠を検討して、正確な歴史的な根拠、つまり来源を明らかにする。具体的な研究方針の一例として、記念碑体と草書体の字形の出現傾向と碑文の成立年代との分析における歴史的な視点からの考察を行うことで、より広範な象形文字ルウィ語の歴史の究明に新しい光を当てることができる。

### 4. 研究成果

(1) J.D.Hawkins の『Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions』(2000)を使用して、出土別に、キリキア、カルケミシュ、ビート・アディニ、サマル、マラティア、コマゲネ、アムク、アレppo、ハマ、タバールに分類し、カルケミシュ碑文における碑文言語の言語変遷モデルの initial-a-final と r 転化の有効性を上記の地域の中のアムク、テル・アマル、サマルから発見された碑文言語の分析から明らかにすることができた。

(2) 象形文字ルウィ語碑文に散見される字体の中で、記念碑体と草書体が混在して使用されている碑文があり、これらの碑文の成立年代と字体の混用状況の分析から、記念碑体の使用には、より象形・絵画的で装飾的效果が高いことが看取され、逆に、草書体の使用には記述に際してのより経済的な理由が施行されることが明らかになった。

(3) ルウィ象形文字の造字法には通時的に書記の文字音価付与の工夫が垣間見られる。音価の付与における頭音法の使用、一文字に付与する多音法(polyphony)、[r][a][m]音表記の文字工夫、明確な期限はなお不明であるが、「sa」「ta」「za」「tu」「zi」「ha」等の音価を示す字体の同音異字の存在などが指摘される。

(4) 上記のような象形文字の存在は比較文字学的にも非常に興味深いものである。つまり、日本の漢字仮名交じり表記法に類するヒッタイト楔形文字の表記法(シュメール表語文字、アッカド音節文字、ヒッタイト音節文字の 3 種類の文字体系の駆使)とルウィ象形文字の表記法(「象形の」表語文字、音節文字の混用表記)の確認がアナトリア諸言語に確認されるのは言語の系統的な帰属を超えた比較文字学的に共通の文字創造の源流を推知させる特徴といえよう。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

大城光正、象形文字ルウィ語碑文の字体の

比較考察、西日本言語学会誌『ニダバ』、査読有、43号、2014、pp.50-58.

大城光正、象形文字ルウィ語の通時的考察 - initial-a-finalとr転化を中心にして -、西日本言語学会誌『ニダバ』、査読有、41号、2012、pp.81-87.

〔学会発表〕(計1件)

大城光正、象形文字ルウィ語碑文の字体の比較、西アジア言語研究会、2013年12月22日、京都産業大学、

〔図書〕(計1件)

大城光正(共著)「ヒッタイト」、『世界史史料第1巻 古代のオリエントと地中海世界』、2012年、岩波書店、pp.88-102.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大城 光正 (OSHIRO, Terumasa)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：40122379